

青年期における孤独感と親および友人への愛着との関連

—円環イメージ画を用いた検討—

18008PCM 深谷 結芽

I. 問題・目的

落合 (1999) は青年期の孤独感を「人と親密な関係をもとうとする志向性を持ちながら、それが実現しないときに、人間同士の理解・共感の難しいと感じ、自分はひとりだと感じること」であると定義し、その意味あいには自分を含む人は個別性をもつ存在であることに気づくことによって変化すると述べている。そして落合 (1983, 1999) は孤独感を LSO-U (人間同士の理解・共感の可能性についての感じ方の次元) と LSO-E (自己の個性の自覚についての次元) の2つの下位尺度得点における高低の組み合わせから A, B, C, D の4つに類型化し、A から D へと発達的に変化すると考え、C 型の孤独感に長期間とどまることは人格形成上での否定的影響となると考察している。

孤独感と関連がある要因として愛着が挙げられる。愛着とは「ある人と愛着対象 (人物) との間の絆やつながり」であり、幼少期における特定の対象への愛着が内的作業モデルを形成し、その後の対人関係を想定すると考えられている (Bowlby, 1969 黒田・大羽・岡田・黒田訳 1993; Bowlby, 1973 黒田・岡田・吉田訳 1991)。青年期は愛着関係を築く対象が親から友人へと移行していく (片岡・園田, 2010) 一方、親は安全基地として機能する (Bowlby, 1973 黒田他訳 1991)。佐藤 (1993) は、高校生や大学生では親および親以外の対象への愛着の両方が対人関係の持ち方と関連があることを示した。このように青年期において親および友人等の親以外への愛着は両方重要であるという見方がある。

藤原・石田 (2010) は友人関係機能が LSO-U の得点を高めることを示し、最も親しい同性の友人との関係が、人間同士の理解・共感の可能性を自覚するうえで重要となることを示唆した。

一方で友人関係機能と LSO-E の関連は見られず、個別性への気づきには友人関係機能以外の事柄が関係していると思われる。大橋 (2012) は、前思春期から青年期にかけての母子関係の変容について検討した結果、思春期から青年期にかけて自己と母親の対象化がなされ、それに伴い一方的な関係から母親を個として自覚し相互的に関わる関係へと変容することを示した。このことから、本研究では LSO-E と親への愛着には関連があると考えられる。

また本研究では、親子関係を捉えるとされる投影法の1つである松尾・小川 (1998) が提唱した円環イメージ画 (以下、円環と記す) を用い、質的に親子関係・友人関係について検討する。円環における2円の大きさの比や関係、位置、距離は五十嵐 (2009) によって親への愛着との関連があることが示されている。

本研究では学校による孤独感型の違いや、愛着や孤独感と円環イメージ画に見られる関連について検討し、C 型の孤独感から D 型の孤独感へと移行する過程について愛着の観点から考察を行うことを目的とする。

II. 方法

対象：分析対象は A 高校 1 年生 104 名 (男子 49 名, 女子 55 名), B 大学 3, 4 年生 107 名 (男性 28 名, 女性 79 名) だった。

質問紙：フェイスシート、孤独感尺度：LSO (落合, 1983), 佐藤 (1993) を一部改変した幼少期の親への愛着尺度 (五十嵐・萩原, 2004), 最も深いつきあいの友人への愛着尺度 (板村・田邊, 2012), 円環イメージ画用の A4 紙 2 枚 (親-自分・友人-自分), 円環の各観点に関する質問項目から構成された。

III. 結果

高校生と大学生で比較を行うことと先行研究

との連続性を維持するため、先行研究通りの因子で分析を行った。学校別に算出した α 係数は、高校生の不安尺度以外では.60以上であった。

LSOにおける2つの下位尺度得点の高低から4つの孤独感型に分けたところ、B型が1名のみだったためさらに未成熟型(A)、成熟途上型(B・C)、成熟型(D)の3つの孤独感型に分類した。学校と孤独感型で χ^2 検定を行った結果、未成熟型では大学生より高校生が多く、成熟途上型では高校生より大学生の方が多いことがわかった($\chi^2(2) = 11.588, p < .01$)。

親および友人への愛着のうち、安心・依存尺度と逆転した不信・拒否尺度もしくは拒否尺度の得点を合わせ、合計得点の平均値で高群・低群に分け、その組み合わせから愛着を4群に分類した。度数が5未満だった成熟途上型以外の度数で、愛着の4群と孤独感型の χ^2 検定を行った結果、LL群とHL群では成熟型が未成熟型より多く、HH群では未成熟型が成熟型より多いことが示された($\chi^2(3) = 24.338, p < .01$)。

親および友人と自分の円環の調査対象者評定に基づく距離や研究者評定に基づく距離についてLSO-U得点の高群・低群の t 検定を行った結果、親と自分の円環($t(23.601) = -2.679, p < .05$)および友人と自分の円環($t(209) = -3.136, p < .01$)それぞれで低群の方が高群より距離を有意に遠く評定し遠く描くことが示された。また、2円が分離していない群と分離している群の度数を用いてLSO-Uの2群の χ^2 検定を行った結果、親と自分の円環のみ、2円を離さず描いたと評定した者や遠くに描いた者は低群より高群で多く、離して描いたと評定した者や離して描いた者は高群より低群で多いことが示された($\chi^2(1) = 6.555, p < .05$)。一方、LSO-E得点の高群・低群と親と自分の円環の大きさを χ^2 検定した結果、調査対象者評定、研究者評定のどちらにおいても有意な差は見られず($\chi^2(2) = .603, ns$)、友人と自分の円環では度数が5未満で分析ができなかった。LSO-Eの2群と位置においても度数が5未満であったため、分析ができなかった。

IV. 考察

先行研究同様に未成熟型は大学生より高校生の割合が多い一方、成熟途上型は高校生より大学生の割合が多かった。高校生は価値が似た人との出会いから自分と似た友人から安心感を得る機会が多くなる一方、大学生は学校という枠が弱まり、コミュニティが多様になる環境の中で自分から連絡を取ることで友人関係を作り、次第に自分が選んだ友人と付き合うようになる(中上・加藤・菅野, 2007)。大学生が友人を選ぶ過程では、自分と似た人だけではなく自分とは全く違う考えを持つ人も現れると想定され、そのような関わりの中で他者との理解・共感の難しさを感じる場面が高校生よりも多いと考えられる。このように高校生と大学生における友人関係の質的な違いが孤独感に影響している可能性が推察される。

また親と友人への愛着の両方を良好と認識している者は未成熟型が多く、友人への愛着を良好ではないと認識している者は成熟型が多いことが示された。さらに割合に注目するとLL群で成熟途上型が比較的多いことがうかがえ、HL群で成熟型が多いことが示唆されたことから、親との関係を見直し愛着を良好なものであると認識することで成熟途上型から成熟型に移行することに繋がる可能性があると考えられた。しかし友人の愛着が良好ではないと認識しているLL群とHL群で成熟型が他の孤独感型より多く、成熟型の孤独感に関しては友人への愛着が単独で関連している可能性も考えられる。

そして孤独感の各下位尺度と円環との関連を検討した結果、2円の距離や関係には人間同士は理解・共感できると思っている様子が投影される可能性が示唆された。円環の大きさ、関係、位置、距離について調査対象者評定に基づく分類を分析に用いた場合と、研究者評定に基づく分類を分析に用いた場合では各学校における円の大きさや関係で異なる結果が見られ、結果の違いが生じる背景について検討を行うことで、現代の青年期における孤独感をより詳細に明らかにすることにつながると思われる。